

法主即管長制度確立讃辭

祖廟中心制度の現在と將來

鹽 出 孝 潤

身延を宗門の中心とすることが大聖人の御聖意であることは、御遺文の上にも歴史的事實上にも既に明瞭である。それが滅後ある行懸りの爲め、諸山は外に向つて分張するに努め、中心に聚ることの出来ない事情に置かれた爲め、各山競ふて「我山尊し」と説き、果ては分裂の觀を呈するに至つた。明治の初期に於て、管長設置といふ政治的統制の必要上、舊稱一致派の諸山は一宗の下に集まつたが、それは行懸りの儘で寄合世帯を作つたに過ぎなかつた。心ある人々は御聖意に鑑み、且つ宗門の將來を思ふて中心確立の運動を起したが、無慘にも改革の叫びは因襲の勢力に壓倒された。而もそれには宗門の滅亡を思はしめる如き、醜い大紛擾を伴ふてゐた。然るに今回は、さういふ紛亂を繰返すことなく、祖廟中心制度の確立を告げたのは、眞に宗門の一大慶幸である。無論有

力なる耆宿の積年の苦心不斷の唱導が、この時運を促したに相違ないが、宗門の輿論が之に擊節共鳴したのは、實に尊むべき進歩であつた。殊に身延山側の諸機關が、一山の私情を忘れ門末の特權を抛つて、欣然即應された襟度に對しては敬意を表せざるを得ない。要するに、時が來たのだ。

この時の力に乗つて、更に大なる時を造らねばならぬ。

教學上の専門語に、従一出多從多歸一といふ語がある。一元より萬法を演繹し、萬法は一元に歸納する意である。この語は宇宙の活動運行をも説明すべき、哲學的意義を有つてゐる。今ま之を國家の上に見るに、我國の如きは一元の天皇より發せられる皇道が、萬民に施され、萬民よりする忠誠の赤心が、天皇の一元に集る。この關係が、不斷に活潑に持續する處に、健全にして鞏固なる國家の存在がある。明治維新によりて、一君萬民の體制が復古確立し、従一出多、從多歸一の關係が、緊密圓滑に行はれた結果として、今や、新東亞建設の一大使命を果し得る國運を將來したのである。身延と宗門の關係も、亦た従一出多、從多歸一でなくてはならぬ。身延の教令は、直ちに全宗門に行はれ、全宗門の信仰歸敬は、常に一身延に集中してこそ、宗運の發展伸張を期することが出来る。

去る九月十一日、初代の法主即管長として、望月日謙大僧正猊下御入山の儀を行はれた時、私は宗祖御廟前に感想を告白して、

身延は全宗門の起點であり、また終點である。

と言つた。身延は全宗門に號令する起點となり、全宗門は身延に力を集中する終點となる意味で、畢竟、從一出多從多歸一の關係と同意趣である。宗門は之を制度組織の上に、完全に實現しなくてはならぬ。

現行宗規第四條 管長ハ、總本山久遠寺住職タル人、政府ノ認可ヲ得テ其職ニ就クモノトス。

これが祖廟中心を理想する、法主即管長制度の條文である。無論宗門の歴史的一區劃をなす根本法規であつて、光華燦然たる金文字であるが、この條文の胎藏する精神を具現する宗則は、未だ整備されてない。頭だけはあるが胴體はまだ付てゐない。今後實際制度の制定に着手するのであるが、其處に多少の支障困難が伏在することが豫想される。それは宗門全體が從來の行懸りを捨て、中心確立を要望したのでなく、現在の宗門形態は依然として、昔日の行懸りを固持する情勢が多分に存在してゐる。

會て、宗會席上で云つた如く、新らしき二階を古屋の上に乗せた世に謂ふお神樂普請の如きもので、變則的の建築である。(併し變則でも斯う仕なくては間に合はぬのである)此上は新二階と下の古屋とを通ずる梯子段を設けるのであるが、それには下屋の一部を改造せねばならぬ。そこに多少の支障と困難が伴ふけれども、可成埃りを立てないで出来るだけ便利にする外はあるまい。唯だ

改造の程度については大に工夫を要する點である。宗内一部には大改造論者もあると聞くが、大改造を施すならば寧ろ全部新築する方がよい。唯だ現在宗門は之を許さぬ事情もあることを思ひ、可及的理想に近い制度の樹立に努力すべきである。

法主即管長制度に宿る中心確立の精神を飽迄尊重し、今後あらゆる機會にこれが強化擴充を計り以て宗門の自覺を促し、完全に従一出多従多歸一の宗門を實現して、宗祖の御聖意に副ひ奉る日の、一日も速かならんことを念願して已まぬ。

法國冥合の現證

柴 田 一 能

一、新制度の將來と豫兆

祖廟中心制度の確立に對する慶讚の辭並に感想の一端は、教報七月號「中心制度確立奉告大慶典